# 表紙モノ語り

## 聖人像の輿を先導するラッパ、カーニャ

標本名:笛(カーニャ)　標本番号:H0110333、0110334
地域:ボリビア 1983年収集

◉

山本紀夫(やまもとのりお)
民博 名誉教授
1968年以来、アンデスを中心として世界の山岳地域で
主として伝統的な環境利用の方法の調査研究に従事。
近著に『ジャガイモのきた道』(岩波新書)

アンデスのほぼ真ん中あたりにボリビアという国がある。アンデス諸国のなかでも、とくに先住民人口の多い国である。そのため、ボリビア高地の宗教はスペイン人の侵略以前からのアンデス土着の伝統的な色彩の濃いものである、と私は思っていた。

しかし、そのような考え方はタリハという町の祭りを見て大きく変わった。そこでは、キリスト教がすっかり根づき、キリスト教の祭礼が町をあげての盛大なものになっていたからである。

タリハは、ボリビアの最南端に位置し、標高が約二〇〇〇メートル、人口が数万ほどの小都市である。この町で、毎年の九月に数十人もの町の住民が参加し、一カ月近くにわたっておこなわれる祭りがある。「サン・ロケ」とよばれるものだ。サン・ロケとは、タリハの町にある教会のひとつに安置されている守護聖人のことでもあり、その祭りではこの聖人像を御輿にのせて町の中の教区をねり歩くのだ。

このとき、おもしろい楽器が御輿を先導する。それがカーニャである。カーニャは、スペイン語で竹または竹に類似した植物を意味する。が、タリハでカーニャといえば、ふつう長さが三〜四メートルの竹の先端にラッパをつけた、どこかアルプスのホルンを思い起こさせる笛のことである。この笛を数十人の男たちが手にもち、歩きながら吹くと「ブーッ、ブッ、ブッ、ブッ。ブーッ、ブッ、ブッ、ブッ」という低くて大きな音が道路をはさんだ建物にこだまする。この音は祭礼という非日常的な雰囲気を町中にかもしだすとともに、守護聖人の威信を高めるためのものなのかもしれない。

なお、このカーニャはアメリカ展示「祈る」のコーナーで展示中である。